



職員一丸となって

鴨川市立長狭学園校長 まつもと 松本 ゆきお 幸雄



1 はじめに

長狭学園（鴨川市立長狭小学校・長狭中学校）は、千葉県内初めての小中一貫校として、平成21年4月1日に開校した。小学校3校が合併して長狭小学校が開校し、長狭中学校との小中一貫校「長狭学園」がスタートした。昨年11月1日に十周年記念式典を開催し、今年度で、12年目を迎える。

本校は、鴨川市の北西部に位置し、周囲には田園地帯が広がっている。棚田で有名な大山千枚田は、学区内にある。学区は、過疎化が進み、人口の減少が著しいが、地区民の教育への関心は高い。

2 校長として

昨年着任したばかりの4月1日、最初の職員会議で学校経営について話をする。前校長より、「小中一貫、新たな10年に向けた土台作り」というテーマをいただく。学校教育目標などは、開校以来のものを引き継ぐ。教頭として3年間勤務した学校であったが、校長となると責任の重さが違う。今までと違い、最終的な決断をしなければならない。改めて責任の重大さを感じた。

3 台風による臨時休校

令和元年9月7日（土）、運動会を無事終えた。親族に不幸があり、通夜、告別式出席のため、8日、埼玉県に宿泊する。8日の夜中台風が襲来、市内小中学校は、9日臨時休校となる。本校は振替休業であったため、9

日早朝、教頭へ連絡をとり、学校の様子を見に行ってもらう。門扉、倉庫、屋上フェンスの被害や倒木等があり、対応を相談する。自宅を優先に、安全に来られる職員で復旧の対応をする。停電により、給食センターの休止、また、トイレ、水道等の利用に不安があるため、10日も市内一斉臨時休校となる。10日の出勤については自宅の復旧を最優先とし、出勤できた職員で倒木の撤去作業等を行う。本校は停電が継続するため、11日以降も臨時休校とする。



保護者への臨時休校の知らせは、メール配信していたが、市内で電波障害が発生し、メールが届かないという情報を保護者から得た。更に、市の広報無線も停電で使用できなくなったため、保護者への連絡手段が断たれた。今後の対応をどうするか。公民館で水や食料の配給があると知り、公民館に休校の張り紙をさせていただいた。また、通学路にある看板にも休校の張り紙をさせていただき、連絡手段とした。13日（金）もまだ停電が続く。停電は、市内で本校のみとなった。

14日（土）から16日（月）まで3連休であったが、停電の復旧の確認のため、毎日学校へ行った。15日（日）朝、停電が復旧、17日（火）から学校を再開できることになった。早速、通学路にある看板や公民館に「停電復旧、17日より学校再開」という張り紙を張り、保護者へ知らせた。

17日から学校を再開したが、児童生徒の家の周りや通学路ではまだ倒木や危険な個所もあった。また、停電で街灯がつかない場所もあった。そこで、登下校には十分気を付けること、暗くなる前に帰すことなどを配慮した。更に、断水や停電で洗濯ができない家庭もあり、通学や体育の服装についても各家庭の実態に対応することとした。飲料水についても市や保護者からいただいたものを配布できるようにした。いろいろな配慮をしながら、17日から学校再開することとなった。

その後、10月12日（土）にも台風の襲来があった。学校の停電は、13日（日）早朝に復旧したが、地域の停電は何日か続いた。学校から宿題が出されるが、暗くなると家ではできないという情報が寄せられた。これに対しては、可能な限りでよいこと、学校のパソコン室を午後7時まで開放するなどの配慮をした。

教員になって35年、台風の被害で臨時休校が続くことは初めての経験であった。この臨時休校により、改めて気付いたことがたくさんあった。保護者への連絡手段で当たり前のように利用していたメール配信や電話が活用できなくなることは予想していなかった。また、携帯電話も一般の電話も市の広報無線も使えない中、掲示物が有効であることがわかった。休校の連絡、再開の連絡も掲示物で多くの人たちに知らせることができた。掲示の場所を提供して下さった地域の方々に感謝し

ている。



4 おわりに

緊急事態があった時に、如何に対応するか。教頭と連絡をとりながら、状況を把握し、指示を出し、適切な対応ができた。普段から信頼できる関係ができていたからと考える。教頭だけでなく、職員も復旧に力を惜しまず取り組んだ。全職員一丸となって学校再開に向けて知恵を出し、子供たちを迎え入れることができた。

今年も今まで経験したことがないことが起こっている。コロナ感染症拡大防止のため、3か月にわたる臨時休校、再開後感染防止を考えた学校生活。これに対しても、校長だけでは何もできない。全職員が同じ方向を向いて一丸となって対応している。みんなで力を合わせ、知恵を出し合えば乗り越えられる。職員の力をひとつにまとめることが、学校を創ることにつながると、台風からの復旧や新型コロナウイルス対応の中で改めて感じている。





地域に愛される学校である幸せ



鎌ヶ谷市立第三中学校教頭 原 幸広

1 はじめに

令和元年度、高校籍で中学校という異校種の教頭として着任した。教諭時代に一度鎌ヶ谷市内中学校での勤務経験はあったが、教頭職として、改めて文化の違いに驚き戸惑うことが多かった。今日まで何とか勤務し続けることができたのには、大きく二つの理由がある。

一つは、職場環境である。温かく見守ってくれる校長及び教務主任をはじめ本校職員の協力と、前回中学校勤務時代にお世話になった方々が市教育委員会・市内小中学校等で活躍されていて、何かとアドバイスして頂けるのがありがたい。

もう一つは、地域環境である。本校の学区内にある鎌ヶ谷西高等学校からの転勤であり、学校関係者や地域の方には西高時代にもお世話になった方が多く、引き続き大いに助けて頂いている。

2 学校について

本校は、昭和50年4月、鎌ヶ谷市立鎌ヶ谷中学校より分離独立した。鎌ヶ谷市の北部に位置し、松戸市・柏市・白井市に隣接した地域にある。主に昔ながらの北部小学校のある北部地区と、松戸市と道路一本隔てた住宅地が多い西部小学校のある西部地区の二地域からなっている。特に北部地区には自衛隊下総基地があるため、かなり遠回りして通学することになる生徒もいる。

学校付近は、農村地帯で緑が多く、静かな所にあるが、農業に従事している家庭は、わ

ずかである。東武アーバンパークライン・新京成線・北総線・成田スカイアクセス線の鉄道4線が乗り入れている「新鎌ヶ谷駅」から徒歩10分という好立地条件、道路網も発達、都心へのアクセスが容易であることから、首都近郊の住宅都市として発展している。大きな人口増加は見られないが、東京方面へ通勤する保護者が多い。

3 鎌ヶ谷市と地域のチカラ

昨年度痛感したことは、鎌ヶ谷市教育委員会・鎌ヶ谷市役所や地域の方々に「学校が守られている」という安心感と地域の力強さだった。

学校設備に関しても、故障・破損した際に連絡を入れるとほぼ即日対応してくれた。特に、台風の際には、通学路に複数の倒木があり通行に危険が生じたが鎌ヶ谷市教育委員会・鎌ヶ谷市役所に連絡した数十分後には、早朝にもかかわらず業者が来て倒木を伐採・回収し、何事もなかったように生徒たちが登校できたのには驚いた。

また、様々な行事等における地域の方々からの支援体制を目の当たりにして、本校がいかに「地域に愛されている学校」「地域の方々にとって大切な学校」なのかを実感できた。それは、これまで本校に携わってきた先生方と地域の方々の御尽力の賜物だと思う。

4 新型コロナウイルスとの闘い

今年度は、新型コロナウイルスの蔓延防止のため「全国一律休校」でスタートした。世

界中で流行し、「現代の医学をもってしても、すぐに対応できないことが起こりうるのだろうか？」という不安な思いと「生徒が目の前にいない」無力感・絶望感を感じる日々が続いた。

休校が明け、学校が再開されるにあたり、新型コロナウイルス蔓延防止に向けた学校内外での対応策が一気に増加した。検温、消毒、手洗い指導、ソーシャルディスタンスを保つ指導、給食指導等、全ての学校生活に対して新しい指導が加わった。それは、私たち職員の仕事量増加を意味し、心待ちにしていた生徒たちと会える喜びと共に多忙な日々の始まりだった。そんな時、助けてくれたのは地域の方々だった。

5 三中自慢の応援団

(1)PTA本部役員

6月の休校明け、職員は、放課後毎日「机・椅子・トイレ・ドアノブ等の消毒作業」を行っていた。部活動が再開されると、部活動終了後に作業せざるを得なくなり、勤務時間を遙かに超えた時刻から作業を行わなくてはならなくなったのだが、そのようなとき、PTA本部役員がいち早く協力を申し出て、保護者へボランティアを募ってくれた。7月以降、放課後、職員に代わって消毒作業に協力していただける方を募集し、実行してくれている。おかげで職員は部活動指導に集中できるようになった。

(2)本学区青少年健全育成推進委員会



昭和59年鎌ヶ谷市青少年育成事業として第三中学校区推進委員会が発足し、本校の教育活動のみならず、学区内の小学校や高等学校の学校行事への参加や、地域パトロールを行ってくれて

いる。年に2回行われる情報交換会には、市長・教育長をはじめ地元警察署・防犯協会・民生児童委員、市・教育委員会の通学路担当、学区内の小中高職員及びPTAが集まり総勢50名で行われる。今回の休校明けには、職員の手が回らなかった登下校のパトロールを行ってくれた。

(3)おやじの会

昭和59年頃に歴代のPTA会長が中心となってPTAのOBと現役の父親が参加して結成され、校内整備事業（除草作業・ペンキ塗り・タイル貼り）、体育祭やバザーへの協力をしてきている。今回、登下校のパトロールにも協力してくれた。



6 弱音を吐ける職場を目指して

いかに本校が愛され、地域から支援して頂けるありがたい学校であっても、職場の忙しさは変わらない。今年度は、新型コロナウイルスという未曾有の事態への対応が重なり、職員にもお願いすることが多くなった。在宅勤務や時差登校、授業確保のための短い夏休み等、非日常的な勤務形態も職員の生活リズムに変化を与え、精神的・肉体的なストレスになっているように感じる。打合せ・職員会議を通じて常に「職場で弱音を吐きましょう」と伝え、職場のみんなで助け合いながらこの困難な時期を乗り切りたいと考えている。

高校在職のままであれば出会うことができなかった生徒や保護者・地域の方々、そして職場の先生方。中学校で過ごせる「今」に感謝し、「地域から愛される学校」に勤められる幸せを感じながら、それを次の代につなげることこそが一番大切であると自覚し、それを決して忘れずに職務に邁進していきたい。



教務主任だからこそ



木更津市立真舟小学校教諭 いわい 岩井 かずひろ 和洋

1 はじめに

本校は、全校児童1,018名、34学級（うち4学級は特別支援学級）の大規模校で、開校7年目である。教職員はベテランから若手までバランスのとれた年齢構成となっている。

2 教務主任として意識していること

(1)声かけ

若年層教員への声かけを多くし、学級経営や教科指導の悩みを聞くことに努め、アドバイスをしたり、学年主任に話をしたりしている。直接話をする時間が取れない時には、週案へのコメントでアドバイスをすることもある。管理職には各学級の様子や職員の取組などを随時報告している。

(2)耳を澄まして

職員室では様々な話題が話される。その中に先生方の悩み、要望、取り組んでみたいこと等々がある。それらを聞き流さず、整理し、教務主任として出来ることに取り組んでいる。例えば、会計処理の際、「これがすべてに反映できれば…」という声から、効率的にデータ処理できる会計処理システムを作成し、業務の軽減を図った。

3 危機管理について

昨年度の台風や大雨被害、現在の新型コロナウイルス対応では、管理職の危機管理意識や初期対応から多くのことを学んだ。

(1)避難所運営における対応

私は、「記憶よりも記録」という言葉を胸に留め、昨年度の台風による避難所開設から閉鎖までの記録をすべてデータとして残した。

今年度、本校はその記録をもとに学校独自の避難所運営マニュアルを新たに作成し、避難所運営時の電話対応マニュアルとQ & Aも作成した。これが今年度の臨時休業時の保護者との電話対応に生かされることになった。

(2)新型コロナウイルス対応

休業期間中は児童の預かりや課題配付、学校再開にあたっては分散登校の方法や教育課程の見直しなど、多くの問題に直面した。私は教務主任として子供の学びを保障するために以下のことを行い、日々対応している。

①臨時休業中の学習課題の精選

高学年については、自身で学習を進められるよう教科書に沿った課題を担当に作成してもらい、学校再開後の学習につなげることができた。

②カリキュラムマネジメント

授業の進度を取り戻すために、8月末までは国語・社会・算数・理科を優先して授業を行い、軽重をつけた教科指導を行った。また、全学年の校外学習の縮小と削減など、学校行事のスリム化や教育課程の見直しを行い、学習の見通しをもつことができた。その他の問題に対しても常に素案を作成し、職員全員でどうすればよいのか具体的に検討することができた。

4 おわりに

時代が変わろうとしている。今まで想定していなかったことが当たり前になる。これからも、先輩から学び、後輩と共に学校を動かしていきたい。



叱ると褒める

習志野市立秋津小学校教諭 しまぬき 島貫 マリア



夢だった教員となって2年目を迎えた。現在6学年の担任として、子供たちの成長を感じながら充実した毎日を送っている。

初任者としての1年間は先が見通せなくて、目先のことをこなすことだけで必死だった。子供に好かれない気持ちが強かったのだと思う。その結果、私の話はなかなか子供へ伝わらなくなっていった。しかし、愛情があるからこそダメなことは注意し、何がダメで叱られたかを納得させることが重要であると分かった。研修を通して、私は子供を伸ばす教員は子供に好かれる教員とイコールではないことを学んだ。時には、嫌われる覚悟で叱る。そうすることで、子供との信頼にもつながることを知った。この経験が、子供を伸ばす教員を目指したいと思うきっかけとなった。

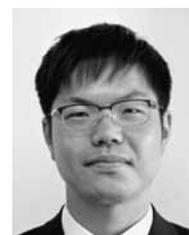
誰でも褒められたら嬉しい。自分が気付かないような自分の良いところを認めてもらえることで、自己肯定感が高まる。注意したり叱ったりする前に子供たちの良いところを褒めると、これから話す耳が痛い話も聞く気になれる。単純なことだが、大切なことだと分かった。

6年生は小学校生活最後の1年。昨年1年間で学んだ学級経営や学習指導を、これからの学校生活に生かしていけるように叱ると褒めるを意識して毎日一緒に成長していこうと思う。



日々精進

いすみ市立岬中学校教諭 いわさき 岩崎 ようすけ 陽介



教師になり2年目を迎えた今年、有難いことに昨年度も担当させて頂いた学年を受け持つこととなり、2年生の担任として日々の勤務に当たっている。昨年度は初任者研修をはじめ、色々な場面で指導や助言を頂く機会に恵まれた。その中で、特に私の中で心がけてきたことは以下の二つである。

一つ目は生徒とのコミュニケーションを大切にすることである。本校では先見ノートという連絡ノートがあるが、このノートを通して生徒とのやりとりや学校生活の中でのふとした瞬間での世間話など一日の中でクラスの生徒とは必ず一度はコミュニケーションを取れるように意識している。こうしたやりとりを繰り返す中で、少しでも生徒との信頼関係を築いていきたい。

二つ目は生徒に任せるということである。どうしても教師が手を出したり、進めたりした方が効率的だと思ってしまい、いろいろなことを私自身が進めていた。先輩から「もっと生徒に任せてみれば？」と助言を頂いてからは、生徒たちの自治を促すような言葉かけを心がけている。

至らない点も多くあるが、まわりの先生方や保護者の方、そして生徒たちに支えられ今がある。今後も生徒と共に成長できるように日々精進していきたい。



子供たちが夢中になる 総合的な学習の時間



八街市立八街北小学校教諭 ごうだ あきお
合田 明生

1 はじめに

私と総合的な学習の時間の出会いは、今から13年前であった。当時初任者であった私は、総合的な学習の時間が「地域」を題材に各校の独創性のある学習であることを知り、面白い学習があるのだと思っていた。はじめは体験を通して子供たちの満足感が得られていると思っていたが、学習を進めていくうえで、子供たちがどこか退屈そうな表情をすることに気が付いた。なぜなら、「教師にやらされている学習」であったからだ。その時より受動的な学習から能動的な学習にしたいと考えようになった。子供たちにとって総合的な学習の時間を夢中になるほど好きな学習になることを目指して、実践を積み重ねてきた。ここでは、本校の取組を紹介していきたい。

2 総合がマンネリ化しないための工夫

子供たちが受動的な態度になる大きな原因として、学習のマンネリ化がある。なぜマンネリ化するのか考察した。①学ぶ必然性が感じられていない②毎年変わらない内容（学年共通）③調べる→発表の1パターン

以上の3点が原因で、子供たちはマンネリ化し受動的な態度になっていると考えた。

そこで本校では、授業改善に取り組んだ。

(1)学ぶ必然性を捉える1か月間の「見」

本校では自分が担任した学級が「どのようなことに興味があり、課題があるのか。」を知ることが重視されている。年度始めの1か月かけて1年間学ぶためのテーマを練る時間を

設定している。

(2)原則毎年、内容の刷新

以下に示すのが本校の過去3年間の総合的な学習の時間のテーマである。

	H30	R1	R2
3-1	動物愛	オリンピック	人生
3-2	農作物	歯	里芋
4-1	方言	おりがみ	自転車
4-2	ヘルプマーク	商店街	チーパス
5-1	獅子舞	獅子舞	獅子舞
5-2	獅子舞	獅子舞	獅子舞
6-1	AED	パラリンピック	感染予防
6-2	街づくり	国際交流	オリンピック

これまでの固定化した内容を変更し、学級単位で進めることとした。その取り組みにより、先生方それぞれの持ち味が生かされるようになったり、時代に合った内容を考えられるようになったりすることができた。5年生は榎戸獅子舞を受け継ぐため、意図的に変えていないが、毎年切り口を変える工夫をしている。

(3)自分たちで考えことを実現した活動

活動が「調べる→発表」の1パターンにならないよう活動を工夫した。例えば、

- ・校内の歯の治療率を高める活動
- ・おりがみ作品展に出品する作品を作製
- ・消防士を招いてAEDの使い方を知る活動
- ・錆びて使えない自転車を直す活動 など

自分たちで考えた活動を実現することにより、子供たちは自分事として夢中になって、取り組むようになった。

3 考える面白さ

私が授業をする上で気を付けていることは、面白いかどうかである。単純に体験活動をしての面白さではなく、考える面白さである。自分たちにとって切実感のある課題を調べていくと、次から次へと課題が出てくる。その課題を協同的にどう解決していくのか考えるのが面白いのである。時に失敗することもあるが、なぜ失敗してしまうのかさえ、考える材料である。この考える面白さに気付くことが「探究」の正体であると私は捉えている。「考えること＝面白い」と感じられる思考場面の設定をするのが教師の役割である。ここで、単元の一例を挙げる。

単元名「守ろう！伝統の灯～榎戸獅子舞～」

	学習過程	児童の主な思考
第一スパイラル	課題設定	なぜ、獅子舞を受け継ぐ必要があるの？
	情報収集	だれに聞けばわかるの？
	整理・分析	獅子舞を受け継がないと、400年の歴史が途絶えてしまう。
第二スパイラル	課題再設定	どのように踊るの？
	情報収集	保存会の方に教えてもらおう。
	表現まとめ	盆踊りや奉納に参加して踊ってみよう。
第三スパイラル	課題再設定	榎戸獅子舞を残すために何をすればいいのかな？
	整理・分析	アイデアを出して分析しよう。 ・新しい獅子頭をつくる。 ・DVDを作って広めよう。
	情報収集	本物の獅子頭を見せて欲しい。 必要な材料は？
	表現まとめ	出来上がった獅子頭とDVDの完成披露会を開こう。

4 不易流行を大切に

「不易流行」とは、松尾芭蕉の考える俳諧理念であるが、現代では、次のように捉えられている。

「不易」…いつまでも変わらない本質

「流行」…その時代における新しさの先端

この2つの言葉は、総合的な学習の時間にも大きく関わっていると考えている。総合的な学習の時間では、各教科・領域で育てた資質能力を結びつけながら問題解決を行う探究的な学習が「不易」になると私は捉えている。さらに「流行」においては、時代に合った題材を教師が子供たちとともに考えることが必要なのではないかと思う。私はこの「不易流行」を常に心掛けて、授業を創り出している。

5 おわりに

今回、紹介した取組が、本校のスタイルである。取り組んだ成果と課題は次のことが挙げられる。

成果

- ・子供たちが授業に能動的になった。
- ・子供たちの思考場面が増え学力が伸びた。
- ・教師の授業力、教材研究する力が伸びた。
- ・地域との繋がりが密接になった。

課題

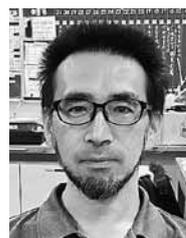
- ・子供たちの思考を深めるための手法を工夫する必要がある。
- ・教材研究を効率的に行う時間の確保が必要である。

総合的な学習の時間は、各校のオリジナリティが出せる反面、マンネリ化を引き起こしやすい。しかし、取り組み方を変えることで、子供たちが夢中になって学習するようになる。私は、これからも子供たちのために教材研究を重ねて、子供たちが夢中になる総合的な学習の時間の授業を創っていききたい。



深い学びを引き出すノート作り

我孫子市立我孫子中学校教諭 かみやま たかし
 神山 孝史



1 深い学びの追求の中で……

ノートの使用目的とはどのようなものか。黒板を写すものか。いや、それだけではないだろう。しかし実際には授業中の生徒の様子を見ていると、板書されたものをそのまま写すだけになっている姿がある。その姿に学習に対する積極性はあまり感じられない。生徒はほぼすべての授業においてノートを使用する。そのノートを「意識的に使用することで生徒の主体的・対話的で深い学びを引き出せないだろうか。」そう感じるようになっていた。

そんな時本校は平成27～29年度にかけて、独立行政法人教職員支援機構次世代型教育推進センターより「新たな学びに関する教職員の資質向上プロジェクト」の実践フィールド校として指定を受けた。当時校内研修部に所属していた私は、それ以来、アクティブ・ラーニング型授業や「主体的・対話的で深い学び」とはどのようなものか、自分なりに追求していく中で効果的な「ノート作り」への試行錯誤をするようになった。

2 国語科教員としてのジレンマ

国語科の目標の一つは、「伝え合う力を高める」ことにある。授業においても、筆者・作者の意図を読み取るだけでなく、それをどのように受け止めたのか、何を思うのかということを生徒同士や、時には教員と生徒、あるいは自己内対話を通して、学びを深めていくことになる。そうした対話の中から新しい発見があったり、自己表現力が身についていっ

たりする。一方で、そうして出た意見を教師が板書したり、それを生徒が写したりする時間も必要であった。ここに国語科教員としてのジレンマがあった。

「板書は正しい答えを書く場所だけに終わっていないか。板書されたものを写すという作業以上に、伝え合い、聞き合い、そのための工夫をしていく時間が重要ではないか」と感じる瞬間があった。そして、生徒から「ノートに板書を写せばよい」という発想を取り除き「ノートを使って主体的・対話的に深く学ぶ」という意識を持たせたいと考えた。

3 ノートの役割

(1)その1 メモ

授業の中では、様々な場面で対話が行われる。その多くは話し言葉であり、文字として残っていない。社会に出ても様々な会議・プレゼン等で語られる言葉は残っていないし、全てを記憶しておくことは不可能。そこで私たちはどうするか。メモを取るのである。

私はノートの1ページを上下2段に分けさせている。上段は板書されたものを写せる場所。その分幅は広がっている。下段には、その授業の中で印象に残ったり、気になった意見や、自分の知らない言葉、教員が言った言葉などをメモする。時には、発表のタイミングではなくても、自分で思いついたこと、考えたことなどを書いて良い。とにかく、その瞬間、書き残しておかなければ消えていってしまうものをメモしておく。ここに、生徒の

個性が出る。それぞれ必要な知識は異なるし、気になることも違う。メモしたことを調べたいと思い、実際に調べ、さらにメモを深めていく生徒も現れる。教員が言葉でまとめたものに絵や図を加えるものも出てくる。その方が、彼らにとっては「分かりやすい」という判断である。生徒は少しずつ、ただ写すのではなく、自分なりに分かりやすいまとめを行う。ノートは全員同じではなく、個々それぞれの学びを振り返ることが出来る、世界に一つだけの「自分だけのノート」が出来上がるのである。

(2)その2 生徒同士の対話ツール

上記のような「自分だけのノート」が出来ること、自分自身の学びを振り返ったり、さらに深めたりすることができる一方で、偏ったノートになる危惧も生まれてくる。国語科における物語文などの理解には多面的・多角的な読み取りも必要とされるが、自分の考えだけでは、その深まりには限界がある。また、生徒の学力差がそのままノートに反映されることになる。

そこで、私は各単元の中で「ノート作りの時間」を設定している。この中で生徒同士、お互いのノートを見合せて、自分だけでは気がつかない考えや聞き洩らしていた内容などを自分のノートに書き写す。

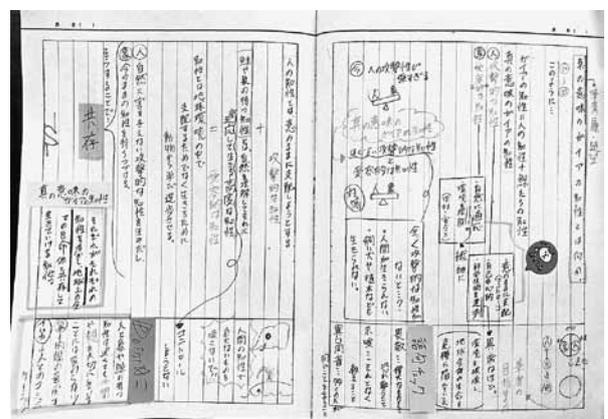
ここで新たな対話が生まれてくる。友達の見解をただ書くのではなく、それを見て質問する生徒、互いの意見を戦わせる生徒が出てくるのである。そこから新しい発見があり、自分のノートを書き直す生徒だって出てくる。まさに対話によって自分自身の学びを深めているのである。

さらには、声には出さなくても、友達が書いたものを見る、見て考えるという作業もまた対話的である。発声する自己表現が苦手な生徒もいる中で、この効果は思いのほか大き

いものである。

このノート作りの時間には、自分のノートを整理する時間もある。これまでの授業の中では時間が足りず、ただのメモになっている内容も、この時間で詳しく書き直す。自分で大切だと思われる言葉を色づけしたり、アンダーライン等で強調したりすることで、学習内容を復習することになる。それだけでなく、授業中には気がつかなかったことが浮かんで来て、それを自分の学習のまとめとして書く生徒も出てくる。

生徒からは「国語の勉強の仕方がわからなかったけど、ノート作りが良い復習になって家庭学習が進む」という声も聞こえてくる。実に楽しそうにノート作りに励む姿を見ると、やらされているという感はなく、主体的に学ぼうとする様子が感じ取れるのである。



4 コロナ禍の中で求められる学び

現在、世界はコロナ禍の真っ只中にある。誰も経験したことがない未曾有の事態である。個々に考え、判断し、行動することが求められる。まさに「主体的で対話的な深い学び」が必要とされているのである。

私もまた、何ができるのか主体的に考え、自分の考えを深めていきたい。生徒に深い学びを実現してほしいと願うのならば、教師こそが深い学びの実践者でなければと強く思う。